



BP1プログラム効果報告

「親子の絆づくりプログラム」の効果の科学的検証(1)

地域医療機能推進機構 (JCHO) 大阪病院 小児科医長 原田 大輔

BPの効果検証を発表

本稿では、現在全国に広がっている親子の絆づくりプログラム「赤ちゃんがきた！」(BP1)が参加者へ与える影響、言い換えるとプログラムの効果について検証したデータを中心にお伝えしたいと思います。

JCHO大阪病院では2012年からBP1を定期開催しており、様々な形でその効果の検証を続けています。そのデータは専門学会である日本小児保健協会でもインパクトを与えており、2020年の第67回学術集会では最優秀演題賞(原田)を、2022年の第69回学術集会では若手奨励賞(阪本夏子先生)を受賞しました。

これらのデータは定期的に論文報告しています。簡単にご紹介しますと、当院でのBP1定期開催の報告と参加者背景や参加者の感想としてBP1は子育てに役立ち、十分な満足度を得たことを報告しました(小児保健研究2019年78巻p435-459)。また、数年間のBP参加者へ郵送での振り返り調査から参加者どうしの交流が2年以上継続していることを報告しました(チャイルドヘルス2020年24巻p535-539)。機会があればこれらをご覧くださいと理解が深まるかもしれません。

今回お伝えするのは2014年11月から2018年6月までに病院BP1参加者の追跡アンケート調査です。BP1は第一子の乳児を子育て中の母親の育児ストレスを軽減することを目指しており、その目標達成のために「親子の愛着形成」、「育児知識の習得」、「子育て仲間づくり」を大きな柱として構成されています。今回の調査は参加者に対してこれらの大きな柱にどれほど効果があったかを検証しました。さらに参加者の満足度に影響を及ぼす因子の同定を試みた結果についても述べたいと思います。

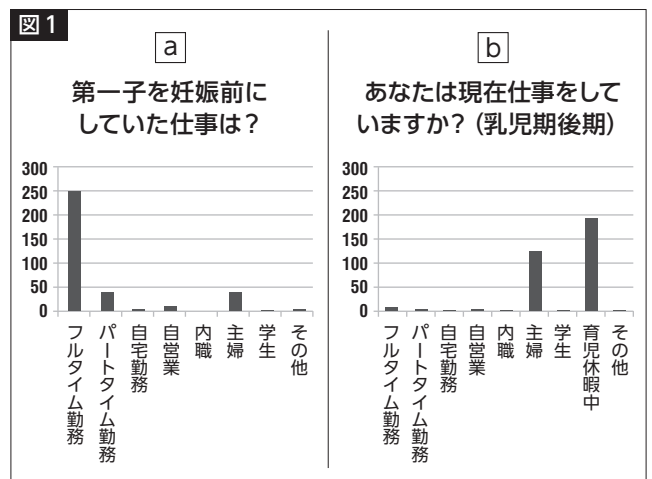
調査時期と主な項目

当院で対象期間に出生した児とその母親に参加を募り、BP1参加者365名および同時期に出生したがBP1に参加しなかった208名の母親を対象に調査を行いました。調査方法はBP1参加者に対してはBP1開始前、終了直後(参加後)、参加半年後の3つの

タイミングで、BP1不参加者には乳児期後期(BP1参加者の参加半年後と同じタイミング)で調査を行いました。アンケートは2~5選択式で、その内容に背景、愛着、ストレス、育児知識、満足度、など48項目にわたる質問が含まれます。BP1参加者の参加前、参加後、参加半年後およびBP1不参加者の乳児期後期(コントロール)の調査票回収率はそれぞれ95.3%、91.7%、72.9%、61.6%でした。

参加者の背景質問では、大多数(96.8%)が核家族であり、居住期間は3年未満が59%、5年未満が79%という短い結果でした。また「親になる前に赤ちゃんのオムツ替えや食事をさせた経験」は85%以上がなかったと答え、「イメージしていた子育てと実際」は70%以上の母親が違いがあったと答えました。これらから第一子を子育て中の母親は孤立しており子どもに関わる経験が不足していることが浮き彫りになりました。さらに参加者の87.5%が「第一子を妊娠したとき」にフルタイム勤務を含めて何らかの形で就労していましたが、乳児期後期には93.9%が「主婦」や「育児休暇中」などで未就労でした(図1)。乳児を子育て中の母親の多くは出産と子育てをする時期はそれまでの生活との違いに強いギャップを感じていることは間違いなさそうです。

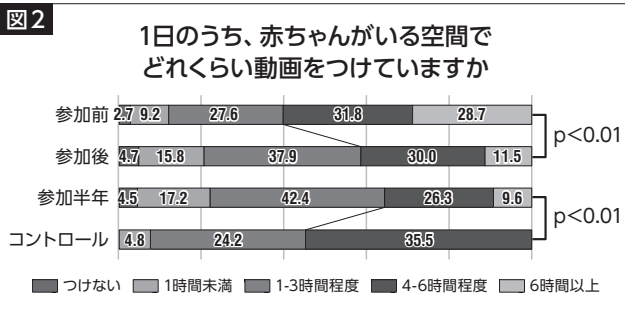
BP1参加者はBP1参加後に「BP1に参加してよかったですか」の質問に91.3%がとてもよかった、8.1%がまあまあよかったと回答し、BP1は参加者の十分な満足度を得ていると考えられました。



BP1がめざす柱 その1・その2

BP1が目指す3つの大きな柱について検証しました。まず『親子の愛着形成』に関する質問では、「赤ちゃんをいとおしく感じる」ことが79.5%の参加者がBP1参加後に増えたと答え、「赤ちゃんと一緒にいると楽しい」ことが85.8%の参加者がBP1参加後に増えたと答えました。これらからBP1参加により母親の赤ちゃんへの愛情が促進されたと考えられます。

次に『育児知識の習得』に関する質問では、「1日のうち、赤ちゃんがいる空間でどれくらい動画をつけていますか」と質問すると参加前は62.2%の母親が4時間以上動画をつけていましたが、BP参加後には39.1%に減少しました ($p < 0.01$) (図2)。これはBP1参加半年後にも維持されており、BP1に参加していない母親(コントロール)と比べても有意に短時間でした ($p < 0.01$)。また「子どもの目標就寝時間」について質問したところ、BP1参加前後で就寝時間が不定だった母親(14.9%)の割合が減少し(6.4%) ($p < 0.05$)、BP参加半年後の目標就寝時間もBP1不参加の母親(21.1 ± 1.0 時)に対してBP1参加者(20.7 ± 1.4 時)が早い時間に就寝していることが判明しました ($p < 0.05$)。これらはいくまでも一例ですが、BP1のプログラム内で取り上げられるテーマが確実に参加者に伝わり、定着していることが推定されます。

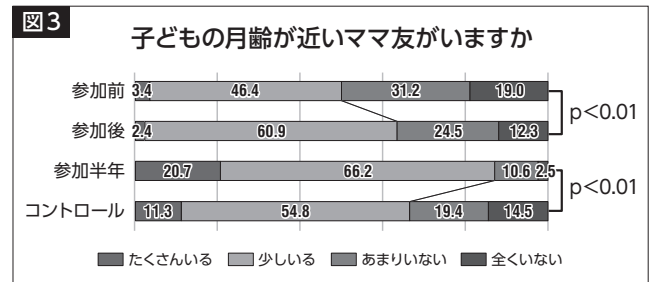


BP1がめざす柱 その3

最後に『子育て仲間づくり』に関する質問では、「子どもの月齢が近いママ友がいますか」と問うと、「たくさんいる」「少しいる」の割合がBP1参加前後で49.8%から63.3%に増加しました(図3)。BP1参加半年後もBP1不参加の母親(66.1%)と比較してBP1参加者(86.9%)は有意に「子どもの月齢が近いママ友」が多い結果でした。

さらに、BP1参加半年後の参加者を対象に、「振り返ってみてBP1の満足度」(以下、「満足度」)に影

響する因子を探るため、アンケートの回答を数値化し、重回帰分析による多変量解析を施行しました。その結果、満足度に影響する因子として、「参加者と交流がある」($p < 0.001$)、「親族以外に子育ての話をできる人がいる」($p = 0.003$)、「子育てにやりがいを感じる」($p = 0.005$)、「子どもをもって社会が広がった」($p = 0.028$)、「子育ての心配ごとがない」($p = 0.036$)、「次子がほしい」($p = 0.045$)の6項目が挙げられました。



本当に意味のある支援になるために

今回の調査では、BP1で構成されたプログラムは、目標としている「親子の愛着形成」、「育児知識の習得」、「子育て仲間づくり」に効果的に働いていることが検証されました。さらに今回の検討では、参加者どうしのBP1終了後長期間にわたる交流継続こそが育児の心配ごとを減らし、育児のやりがいや母親の社会性獲得を促して、プログラムの満足度に寄与することが示されました。またそれらは次子を持つことへの希望にもつながることが示唆されました。

BP1ファシリテーターのみなさんはこれらの結果を胸に刻みながら、プログラムが終了した後も参加者どうしがつながっていけるような関係を「黒子(クロコ)」として後押しすることが大切になりそうです。そうすればその場の満足感はもとより、本当の意味での子育て支援(親支援)になり、日本の未来を担う子どもたちの健康な成長に重要な役割を果たすことにつながると考えられます。

本稿のような検証結果の報告は、母親たちが必要としている支援を届けるために作成されたプログラムの効果の証明と今後のプログラムの修正につなげられます。そして、実施者がプログラムの効果を理解することによって本当に意味のある支援につながります。そして何より、子育て中の母親たちに必要な要素が届くことを確信します。今後も移行行く時代のニーズに沿ったプログラムを維持するため、継続的な科学的検証が重要です。